

ケアの実践とは何か？——看護と現象学との対話から

西村ユミ（首都大学東京）

「ケア」は、他者や道具などのモノを志向し、関心もってかかわっていく営みである。その関係には、両者が大事にされつつ何かが達成されることが含意される。「看護」という、病いや障害、健康にかかわる課題をもつ人々に関与する実践も「ケア」と呼ばれる。看護は、意図的な実践のみではなく、相手の苦しみや苦悩に否応なく応答する、自覚する手前の〈身体〉の営みを支えとしている。また苦しみへの応答は、複数人の協働実践として達成されもしている。この、自覚する手前の看護実践の分析に視座を与えてくれたのが「現象学」である。本ワークショップでは、報告者がこれまで取り組んできた幾つかの現象学的研究を例に挙げ、具体的な事象である看護と現象学との往還が、「ケアの実践とは何か？」という問いにいかに応えうるのかを検討したい。併せて、ケアと現象学との対話のもつ可能性を提案したい。